

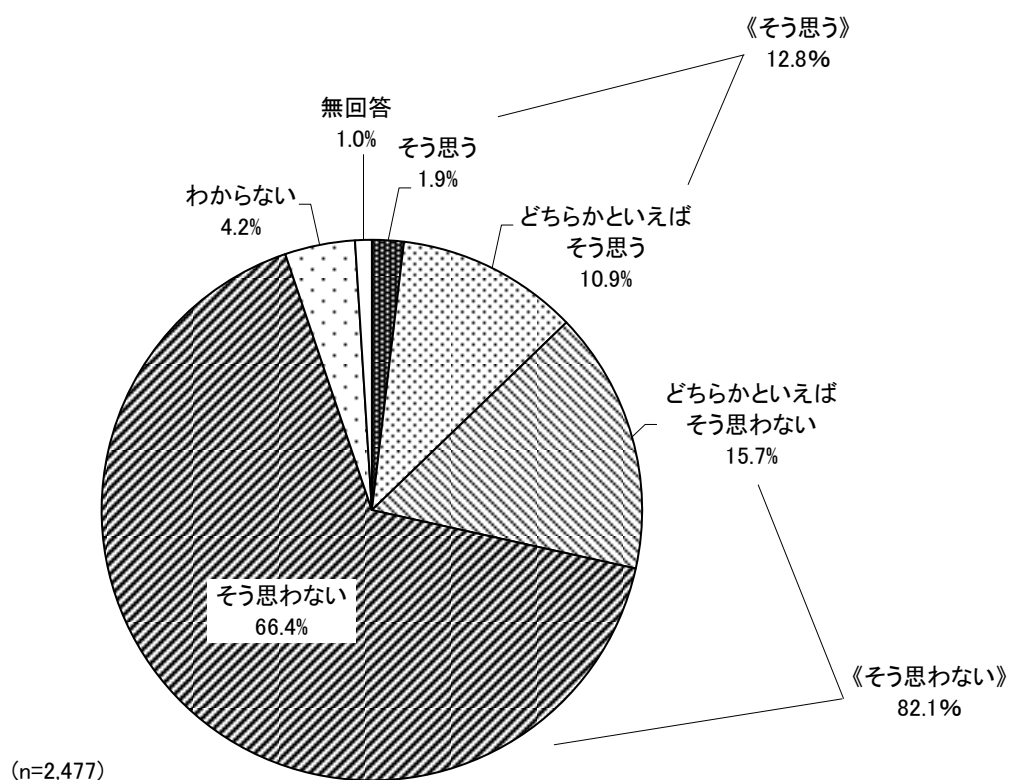
10. 男女共同参画

(1) 「男は仕事、女は家庭」という考え方について

◎ 《そう思わない》が8割を超える

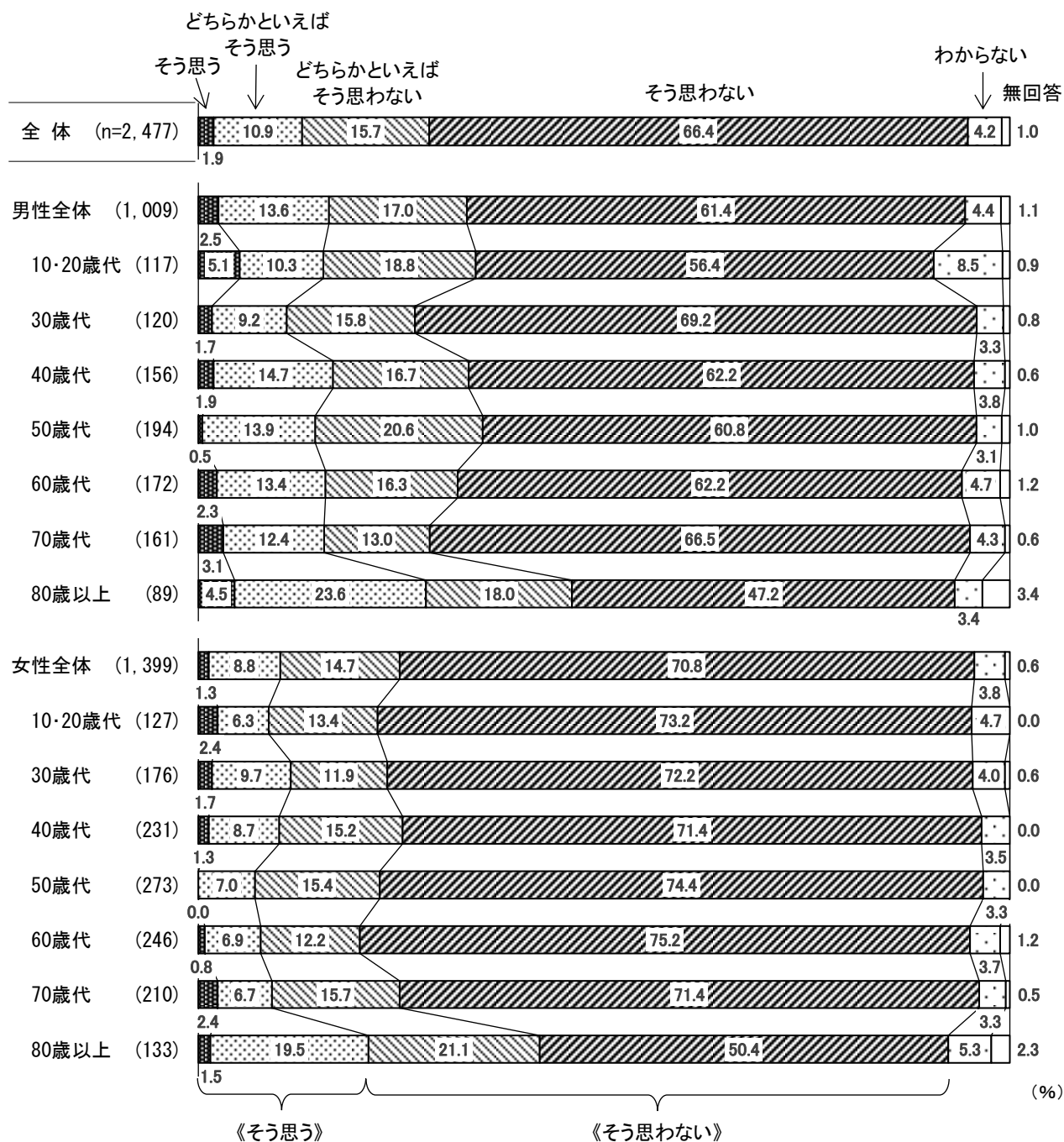
問30 あなたは、「男は仕事、女は家庭」という考え方には共感しますか。(○は1つ)

図10-1-1



「男は仕事、女は家庭」という考え方に共感するかを聞いたところ、「そう思わない」(66.4%)が6割半ばで最も高く、「どちらかといえばそう思わない」(15.7%)と合わせた《そう思わない》(82.1%)が8割を超えている。一方、「どちらかといえばそう思う」(10.9%)と「そう思う」(1.9%)を合わせた《そう思う》(12.8%)は1割を超えている。(図10-1-1)

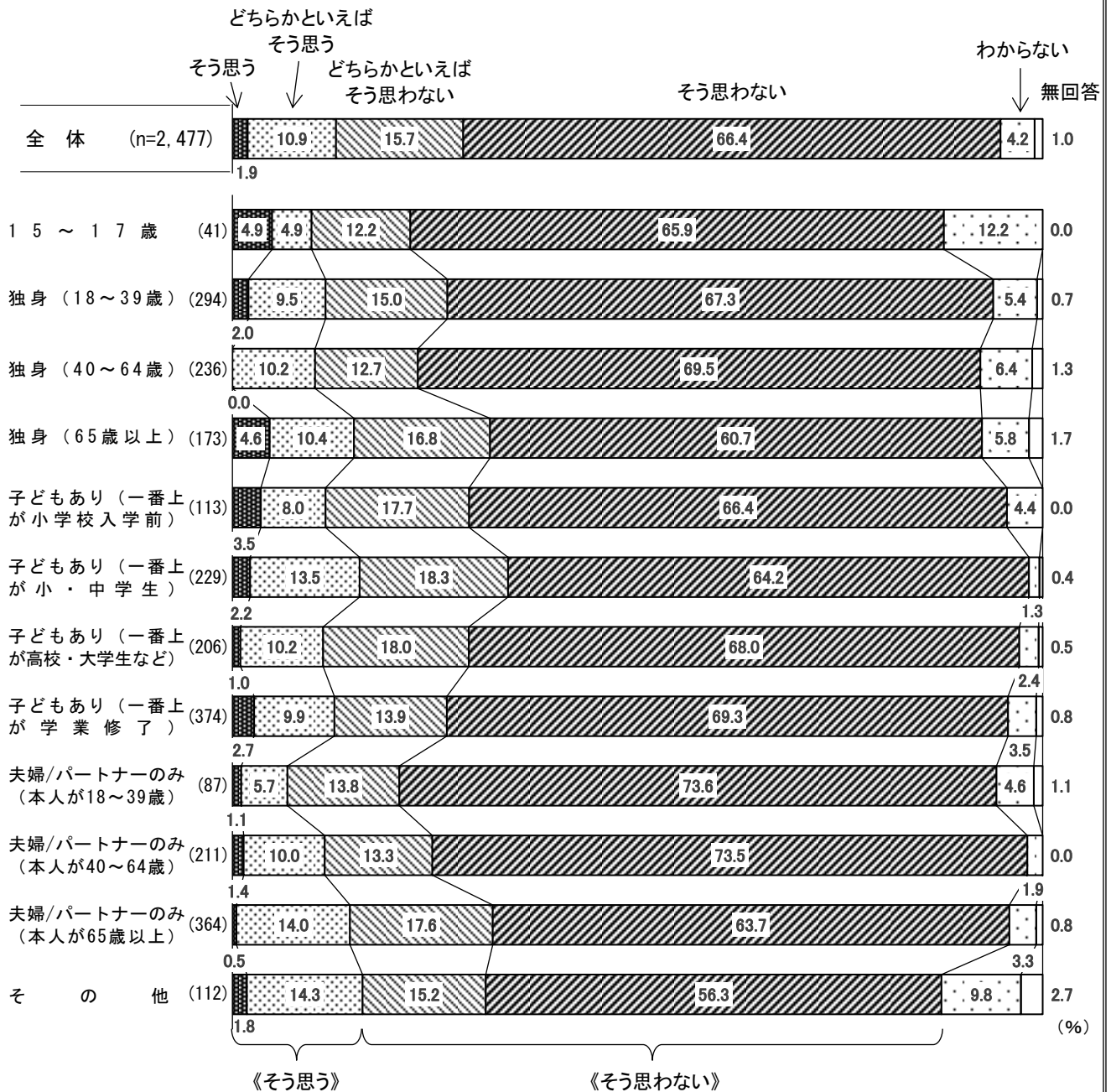
図 10-1-2 「男は仕事、女は家庭」という考え方について（性・年齢別）



性・年齢別にみると、《そう思う》は男女ともに80歳以上が高く、男性の80歳以上で3割近く、女性の80歳以上で2割を超えている。一方、《そう思わない》は女性の50歳代で9割、女性の10・20歳代、40歳代、60歳代、70歳代で9割近く、男女とも30歳代で8割半ばとなっている。

(図 10-1-2)

図10-1-3 「男は仕事、女は家庭」という考え方について（ライフスタイル別）



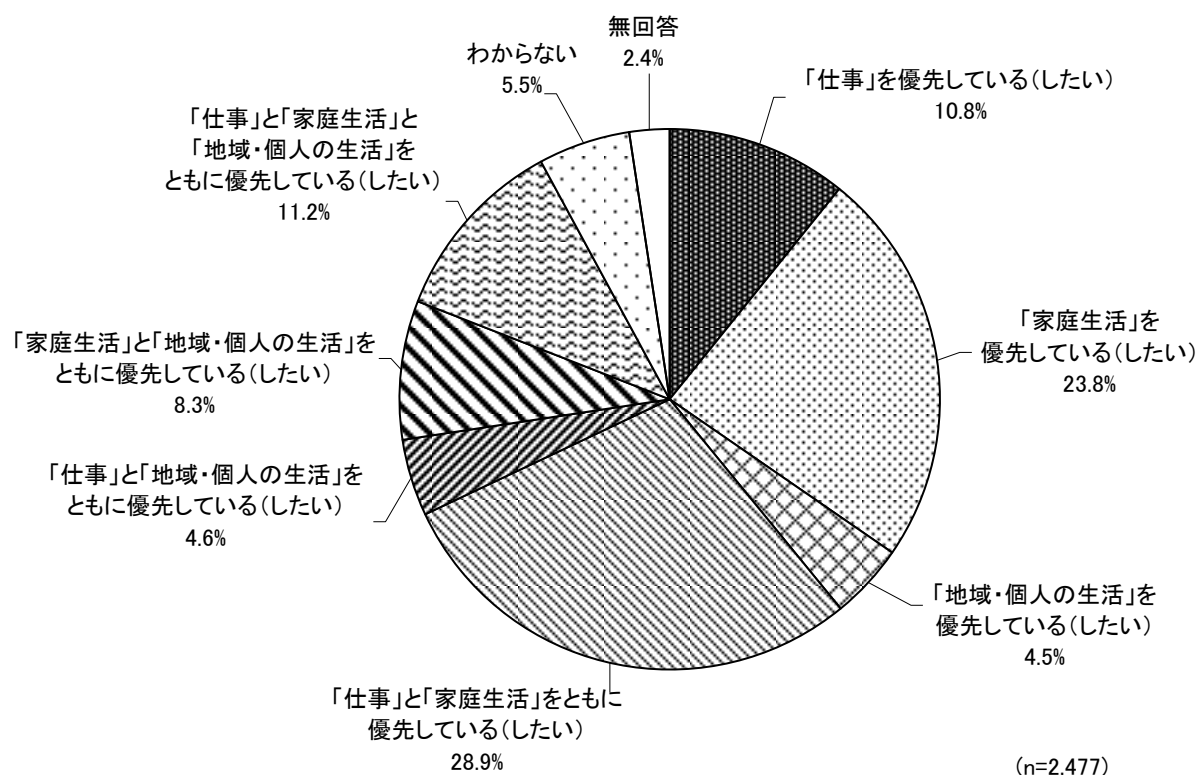
ライフスタイル別にみると、《そう思う》は独身（65 歳以上）、子どもあり（一番上が小・中学生）、夫婦/パートナーのみ（本人が 65 歳以上）、その他で 1 割半ばとなっている。一方、《そう思わない》は夫婦/パートナーのみ（本人が 18～39 歳）、夫婦/パートナーのみ（本人が 40～64 歳）で 9 割近く、子どもあり（一番上が小学校入学前）、子どもあり（一番上が高校・大学生など）で 8 割半ばとなっている。（図 10-1-3）

（２）「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度

◎「「仕事」と「家庭生活」をともに優先している（したい）」が３割近く

問３１ あなたの生活の中で「仕事」、「家庭生活（家族と過ごすこと、家事、育児、介護など）」、「地域・個人の生活（地域・社会活動、学習・研修、趣味、娯楽、スポーツなど）」の優先度についておたずねします。あなたの現状に近いものはどれですか（現在学生の方は、将来の希望についてお答えください）。（○は１つ）

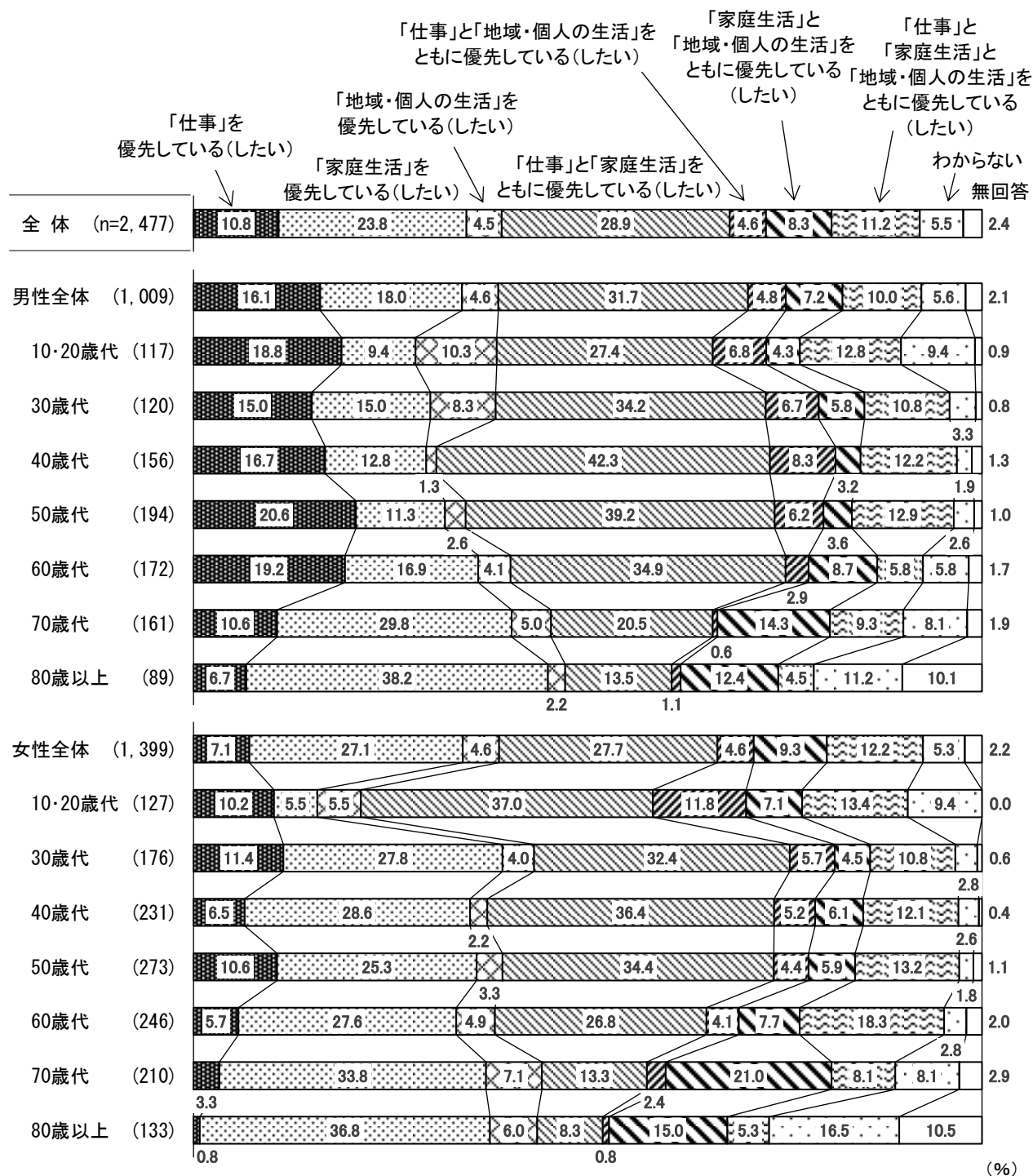
図１０－２－１



「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度を聞いたところ、「「仕事」と「家庭生活」をともに優先している（したい）」（28.9％）が３割近くで最も高く、以下、「「家庭生活」を優先している（したい）」（23.8％）、「「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先している（したい）」（11.2％）、「「仕事」を優先している（したい）」（10.8％）などと続く。

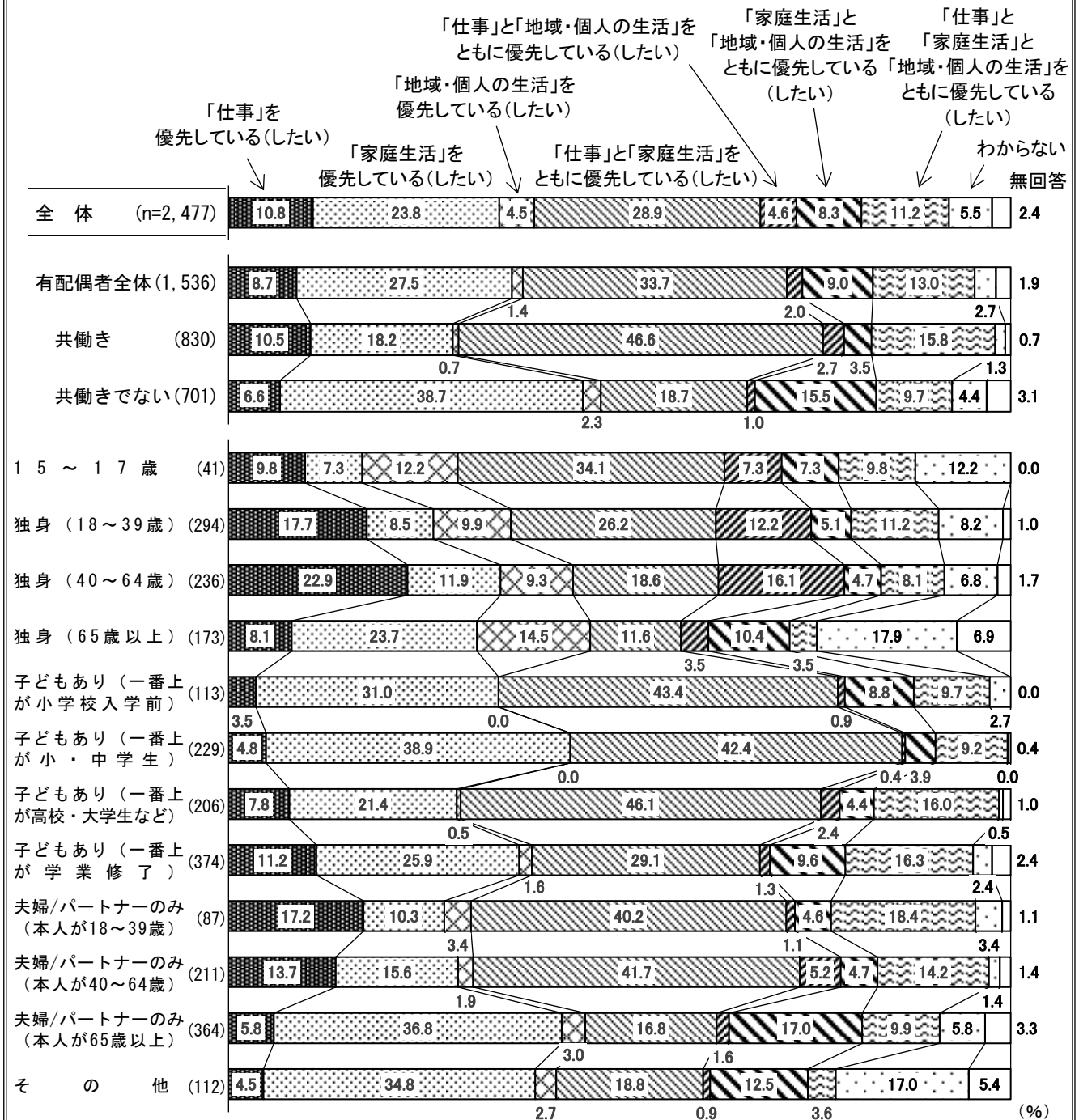
（図１０－２－１）

図 10-2-2 「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度（性・年齢別）



性・年齢別にみると、「「仕事」と「家庭生活」をともに優先している(したい)」は男性の40歳代で4割を超え、男性の50歳代でほぼ4割、女性の10・20歳代で4割近くとなっている。「「家庭生活」を優先している(したい)」は男女とも80歳以上で4割近く、女性の70歳代で3割を超えている。「「仕事」と「家庭生活」と「地域・個人の生活」をともに優先している(したい)」は女性の60歳代で2割近く、「「仕事」を優先している(したい)」は男性の50歳代と60歳代でほぼ2割、男性の10・20歳代と40歳代で2割近くとなっている。(図10-2-2)

図10-2-3 「仕事」「家庭生活」「地域・個人の生活」の優先度
(共働きの有無別・ライフスタイル別)



共働きの有無別にみると、共働き世帯は「仕事」と「家庭生活」をともに優先している(したい)」が5割近くで最も高く、共働きでない世帯は「家庭生活」を優先している(したい)」が4割近くで最も高くなっている。

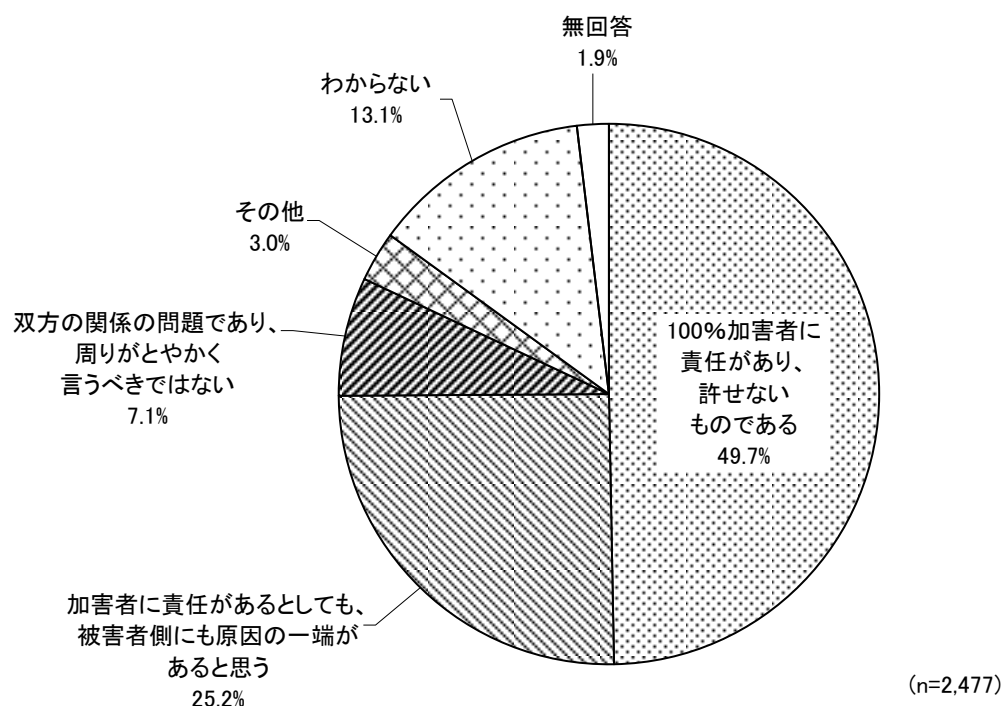
ライフスタイル別にみると、「仕事」と「家庭生活」をともに優先している(したい)」は子どもあり(一番上が高校・大学生など)で4割半ば、子どもあり(一番上が小学校入学前)、子どもあり(一番上が小・中学生)、夫婦/パートナーのみ(本人が40～64歳)で4割を超えている。「家庭生活」を優先している(したい)」は子どもあり(一番上が小・中学生)と夫婦/パートナーのみ(本人が65歳以上)で4割近くとなっている。(図10-2-3)

(3) 「ドメスティック・バイオレンス」に対する考え方

◎ 「100%加害者に責任があり、許せないものである」が5割

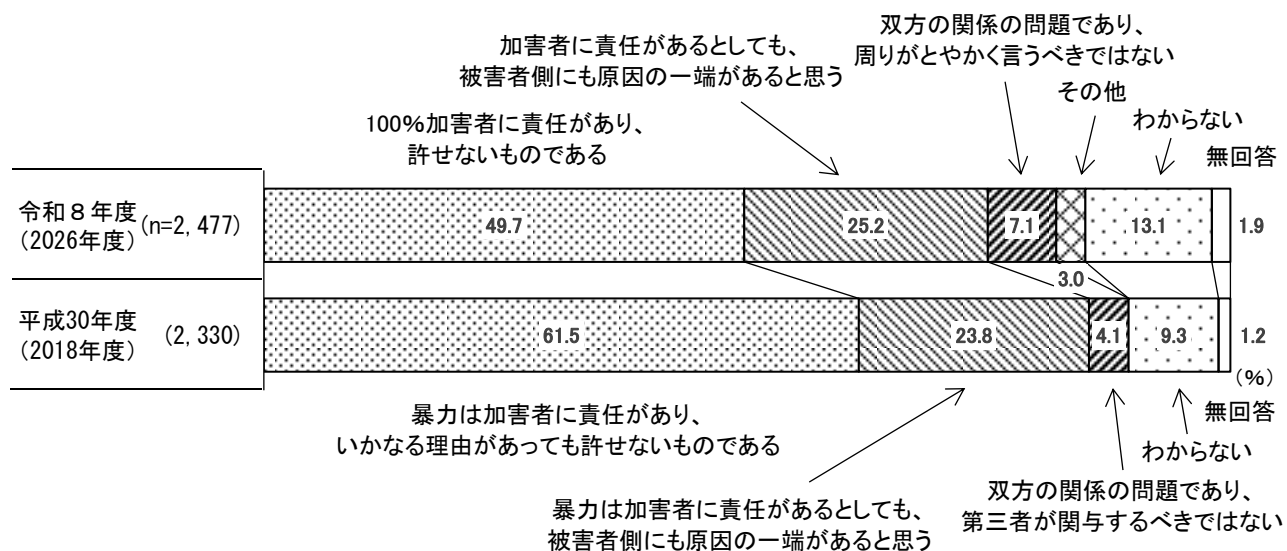
問32 あなたは、「ドメスティック・バイオレンス」について、どのようにお考えですか。
(○は1つ)

図10-3-1



ドメスティック・バイオレンスに対する考え方について聞いたところ、「100%加害者に責任があり、許せないものである」(49.7%)が5割で最も高く、「加害者に責任があるとしても、被害者側にも原因の一端があると思う」(25.2%)が2割半ば、「双方の関係の問題であり、周りがとやかく言うべきではない」(7.1%)が1割近くとなっている。(図10-3-1)

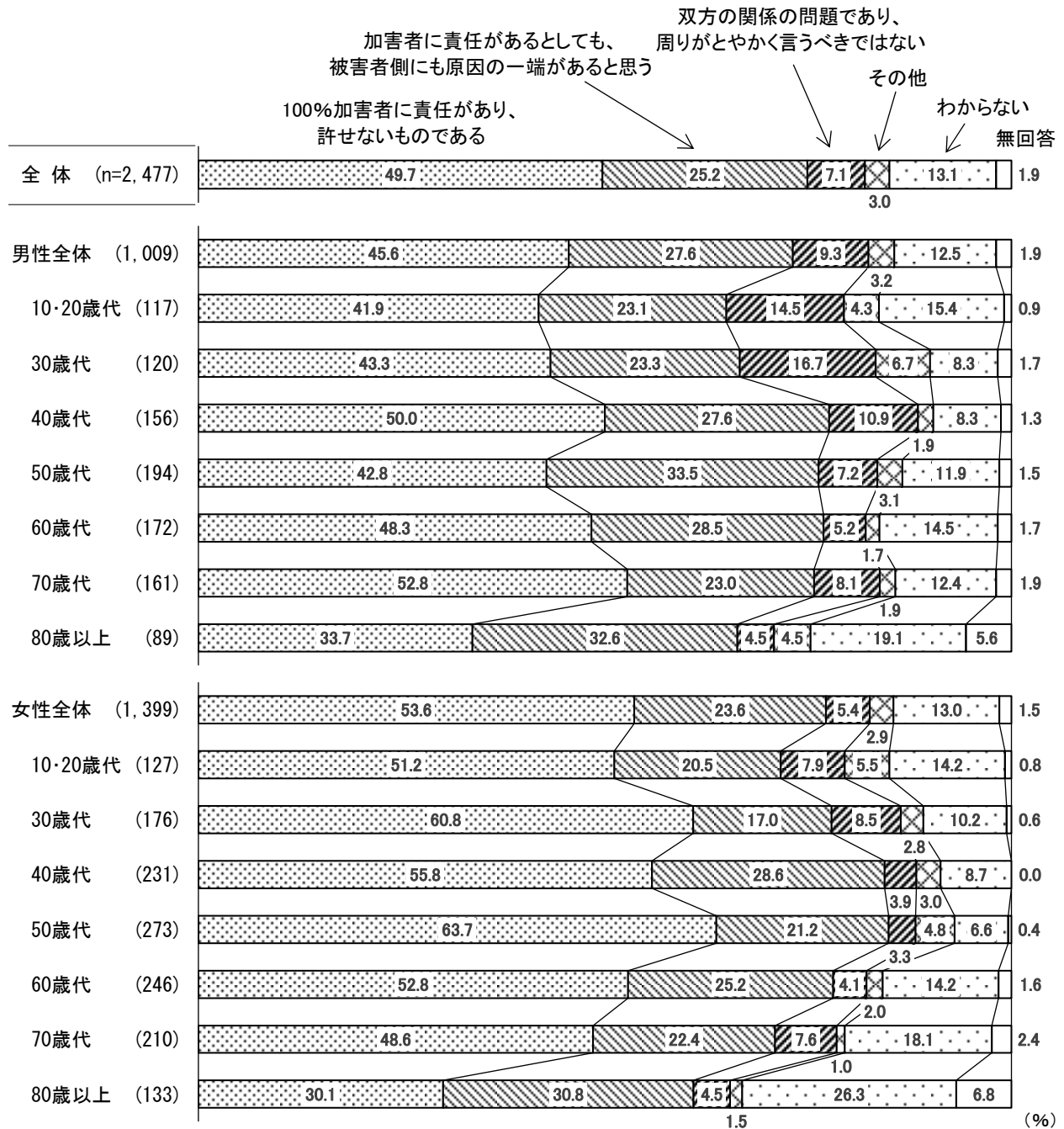
図 10-3-2 「ドメスティック・バイオレンス」に対する考え方（時系列）



注) 令和8年度(2026年度)調査では「その他」の選択肢を追加した。

平成30年度(2018年度)からの時系列の変化をみると、平成30年度(2018年度)の「暴力は加害者に責任があり、いかなる理由があっても許せないものである」と令和8年度(2026年度)の「100%加害者に責任があり、許せないものである」の比較では、平成30年度(2018年度)(61.5%)から令和8年度(2026年度)(49.7%)で減少している。(図10-3-2)

図 10-3-3 「ドメスティック・バイオレンス」に対する考え方（性・年齢別）



性・年齢別にみると、「100%加害者に責任があり、許せないものである」は女性の50歳代で6割を超え、女性の30歳代でほぼ6割、女性の40歳代で5割半ば、男性の70歳代、女性の10・20歳代と60歳代で5割を超えている。「加害者に責任があるとしても、被害者側にも原因の一端があると思う」は男性の50歳代と80歳以上で3割を超え、女性の80歳以上でほぼ3割となっている。

(図 10-3-3)